

福井県内科医会（2025 年 9 月 27 日開催）講演要旨

「2025-2026 シーズンの COVID-19 診療」

大阪大学大学院医学系研究科感染制御学教授 忽那賢志 先生

1. 現在の日本の感染動向：2025 年第 32 週（8 月 4 日～10 日）の定点報告では、全国の報告数は 6.13 と上昇傾向を示した。特に 20～50 歳代の報告数が高く、年齢別にみると若年層から中年層にかけての増加が顕著である。HER-SYS データを基にした集計によると、集計方法の変更などにより以前との単純比較が難しいが、依然として感染は各地で波状的に繰り返されている。感染拡大は第 11 波以降も続き、2025 年夏には第 13 波が確認されている。
2. 変異株の動向：ゲノム解析では、2025 年夏に NB.1.8.1 株が主流となっており、XDV.1 や JN.1 系統から派生した株が増加している。これらはスパイクタンパク質に変異を持ち、免疫逃避能力を強化しているが、重症化リスクが増加したという証拠はない。
3. 入院と重症化の状況：基幹定点医療機関約 500 力所からの報告によれば、2025 年第 32 週の入院患者数は 1,729 人に達し、80 歳以上の高齢者が半数を占めた。ICU 入室例や人工呼吸器使用例も増加傾向であり、全年齢にわたる累計入院者数は約 4 万人を超える。死亡者の約 97%は 65 歳以上であり、高齢者が依然として最大のリスク群である。

4. インフルエンザとの比較：2023 年 5 月から 2024 年 4 月までの死亡統計では、COVID-19 による死亡者数は 32,576 人と、インフルエンザ（2,244 人）の約 15 倍に達した。国内外の研究によると、COVID-19 入院患者の致死率は同年齢層のインフルエンザ患者より 1.2～1.8 倍高い。特に高齢者では 60～80 歳代で死亡率が 1.4～2 倍高いとされる。ただし、2022 年以降の重症化率は低下し、季節性インフルエンザとほぼ同水準に近づきつつあることも報告されている。
5. ワクチンの動向と今後の展望：オミクロン株の流行以降、変異に応じたワクチン接種が継続しており、2025 年度は NB.1.8.1 株などへの対応が検討されている。2023 年度には XBB.1.5 対応ワクチンの特例接種が実施されたが、今後は定期接種化が進む見込みである。米国退役軍人を対象とした JAMA 報告では、ワクチン接種者では COVID-19 とインフルエンザの入院・死亡率に差がなくなる一方、未接種群では COVID-19 の長期死亡率が明らかに高かった。
6. 臨床的まとめ：2023 年 5 月に COVID-19 が 5 類感染症へ移行した後も依然として公衆衛生上重要な感染症であり、特に高齢者・基礎疾患を持つ患者の管理が鍵である。サーベイランス制度が定点報告へ変化したことにより、データ解釈に注意が必要だが、流行は今後も続くと見られる。感染症医療体制の維持とワクチン接種の最適化が、今後の診療方針の中心となるであろう。

（赤井内科呼吸器クリニック院長 赤井雅也）